

閑 (ひま)

教養図書館長 綱 島 窈

英語の school 独語の Schule はギリシャ語の閑という意味をもつ言葉から出ている。仕事をせず自由に学問研究をするところということだったのだろう。図書館は大学での勉強の中心になる。初めて大学にはいった諸君にはすぐにはそれを体得することはできないかもしれない

い。だがその閑をさいて頻繁に図書館へ足を運んでいるうちにやがて図書館の価値がわかってくると思う。自由な学問、自由な研究、それがどんなに尊いものか。閑とは何と貴重なものか。ゆっくり図書館で考えて欲しい。

提案箱から

地方別の2万5千分の1の地図をいれてほしい。でないと、詳しい地形や場所がわからない。特に御殿場周辺。

<お答え>

図書館に現在ある地図の内、地方別の詳しいものについては、神奈川県・横浜市に関する7千分の1から4万分の1の地図が備えてあります。

基準を定めず無制限に購入する事はできませんので、利用者から希望が出されても必ず購入できるとは決っていません。

観光のガイドとしての本でしたら、図書館に御殿場周辺を詳しく紹介したものがあります。

これからの予定としては、当大学に関連のある地区(例えば、畜産学部のある青森県十和田とか、水産学部のある岩手県気仙郡等…)の詳しい地図を購入したいと思っています。

尚、資料の購入希望については、図書館のカウンターに申込用紙が備えてありますので、これからは、提案箱でなくカウンターの係員に直接申込んで下さい。

{ 開 館 時 間 }

- ① 教養図書館
9時から5時まで(土曜1時まで)
- ② 医学図書館
9時から7時まで(土曜5時まで)
- ③ 衛生図書館
9時30分から6時まで(土曜3時まで)
- ④ 白金図書館
9時から7時30分まで(土曜5時まで)

6年間教養図書館長をつとめられた、立川昭二先生に変わり、4月より綱島窈先生が、図書館長を引継がれましたので、お知らせいたします。

「マルテの手記」

吾 妻 寛 治（独語）

「マリアが、男の名か」。怒声と共にS大尉の鉄拳が、Kの両頬に飛び交った。「分隊長、リルケは男であります」。Kの一言は、更に凄まじい鉄拳を招いた。私物点検の折である。入団に際し、愛読書の持ち込みが許可された。思想調査の風説もあったが、全員が思う一冊を持って来た。愛読書の著者と書名を、分隊長に申告する。三高文乙出身のKは、インセル版の原書を高くかざして、申告した。「ライナー・マリア・リルケ著マルテの手記」。「貴様は女の書いた本をこの海軍に持って来たのか」。「リルケは、女ではありません」。このKの返答に対して、S大尉は冒頭の言動に出たのである。T大法学部出身のS大尉は、同じ予備学生ながら、既に一廉の海軍々人になり切っていた。この時以来、Kは要注意人物とマークされ、事々に辛い仕打ちを受ける。Kは沖縄戦で、特攻の一機として突入する。その直前、追浜基地で

奇遇した時、Kは私に言った。「たとえ生き残っても、Sの居る大学には行くなよ」。戦後、信大文理学部の独文科教師となった折、学生の間に一寸としたリルケ・ブームが起り、この詩人を読む羽目となった。「マルテの手記」の時は、口を開くと涙が溢れそうになり、学生達にいぶかれた。独法の専攻とは申せ、S大尉は真実リルケを知らなかったのであろうか。リルケを本当に女性と信じて疑わなかったのだろうか。ジョルジュ・サンドの例もあるものを。マリアの名からリルケを女性と極めつけたS大尉も、終戦直前、南方より内地廻航の折乗艦を電撃され海没された。私には切ない思い出を持つ「マルテの手記」のような本が幾冊もある。それにしても、リルケの両親達は罪な名付けをしたものである。因ちに、私自身は、ニーチェの「ツァラトゥストラ」を申告した。 -了-

昭和51年2月20日

「古本とのかかわり」

岩 内 亮 一（社会学）

私は古本と長いつきあいをもっているが、ふりかえてみると、学生時代がもつとも懐かしい。当時はまだ経済成長という言葉もない時代で、学生は特殊な例外を除いて経済的に困窮していた。百円出せばいくらかましな食事をとることができたが、50円程度の安い定食で我慢して古本を買ったものだ。神田の駿台下から神保町にかけて、古ぼけた本屋が軒を並べていた。一軒一軒の店を覗いてめざす本を探しまわったものだ。皮の鞆がはちきれそうになる程、買いこんで下宿へ戻って包みを解くのは無上の喜びで

ある。新本もほとんど古本屋で入手したが、古いものを買うときにはかなりの勇気を要した。清水の舞台からとびおりる思いで、尾高邦男『職業社会学』や奥井復太郎『現代大都市論』などを自分のものにした思い出は今でも記憶に生々しい。大学院時代、明治・大正の文献が必要になり、再び神田へ足しげく通うようになった。ところが訪ずれる度に街並が変わるのに気づいた。歯が欠けるように一軒の店が壊される。間もなく鉄筋の建物がたつ。そして古本屋は新本屋に変身する。後で分かったことであるが、1960

年代は諸外国の日本研究が盛況を極めた時期で、アメリカなどの学者や図書館員が来日し金に糸目をつけず何でも高値で買い漁ったのだ。その結果、古本屋らしい店舗が減るだけでなく、いくつかの変化が生じた。古本は古書といわれるようになり、都内のあちこちにある古本屋が神田の青空市場に店を並べる古書展が定期的に催おされるようになった。

私の古本との接触にも大きな変化があった。品薄で高価な古本を神田でもとめることを諦め、国会図書館で読むことにした。歴史上の文献なので、ただ意味を拾うだけでは不充分であ

る。ノートに重要な部分を筆与しなければならぬ。膨大な時間がかかるが正確に読むくせがついた。やがてゼロックスという複写機械が普及するに至る。大学に職を得てからは、もっぱらこの文明の利器に依存するようになる。資料集覧のスピードは飛躍的に高まったが、コピーしたものを整理するのが大変だ。そのうちに熟読と筆写の習慣を失なう。文明の利器は人をなまけものにす。学生のころ、何軒も探しもとめて一冊の本を手にした興奮は、今でも懐かしい。またそれは貴重な思い出でもある。

読書の推し

津 末 玄 夫（生物）

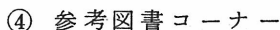
私は少年の頃から今迄色々な本を読んで来たが、どういう方針で本を読もうかと考えた事は一度もない。しかし今から振り返ってみると明瞭な軌跡を示している。中学の頃から大学を卒業する位の間は手当たり次第乱読した。いわばスクリーニングをやっていたわけである。大学を卒業して数年経った頃からは特定の著者の作品について熟読するようになった。幸田露伴の全集を読破しようとして、半ばにして放り出したこともあった。パスカルのパンセを読んで、よくしなる鞭で打たれるような想をした事もあった。

“風に乗って来たメアリポピンズ”で有名なトラバースも愛読書の一つである。この人の作品を読めば分るように世間一般とはまるで違っている。例えばこの人は自分は非常に長寿なのだという感じを持っている。また世界は自分達が作ったのだという感じを持っている、丁度我々が自分は人間であるという感じを持っているように。トラバースさんの肉体は百年とは生き

ないであろうに。これは印度式に言えば梵である。ブラフマンが人の形を取ったのである。十五年程前にトラバースさんが来日した時、私は愛読者の一人として招かれる光栄に俗した。小人数の集りであったので世話人の方が何かきいておきたい事はありませんかと言って下さったが、私は省りみて自らの卑小なことを慚じ、おじぎをして引き下った。

骨董屋が弟子を教育する方法は良い作品にのみ接せさせることであると言う。そうしておく魔物を見た時に異端の臭いをかぎつけ得るようになるという。読書の場合にもこの方法は適用し得るかも知れない。色々な先生方の推薦図書には世界の名作が並んでいる。学生諸君の中でたとえ一人であったにせよこの本の中に自分の個性にふさわしいものを見出し、進化した魂と接する機会を持つよすがとなるならば、図書館の努力も、我々が重い筆を取ったことも報われたと言うべきものであろうか。

図書館内の配置



⑤ セミナー図書コーナー

⑥ 推薦図書コーナー

⑦ 特別室

⑧ 一般書架

① カウンター

② 閱覽席 120席

③ 雑誌コーナー

